ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集

福森 真一

現在の勤務校等
鹿児島県大崎町立菱田小学校

在外での勤務校／帰国年月
ジョホール日本人学校／ 2011 年帰国

異文化と出会ったとき、違和感や嫌悪感を抱くことがある。しかし、その理由や背景が分かればお互いの理解が進む。こうした事例を鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会では、手軽に使えるワークシートにまとめて「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」として発行。ウェブサイト上で公開している。

「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」pdf

実践・活動の内容

国際理解教育では、異文化との違いをプラスの側面で捉えることが多い。しかし、実際に異文化をもつ他国の方々と共に生活していると、日本人のマナーや常識では理解できない言動に出会い、違和感や時には嫌悪感を抱くことも生じる。「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」は、あえてここに着目し、日本人が感じた違和感・嫌悪感の元となった他国の方々の言動には、その国の人々なりの理由や背景があることを知ることによって、お互いに分かり合うことができることに気付かせ、グローバル人材としての素地を育むことを目指したワークシート教材集である。

ジョホール日本人学校（マレーシア）での現地校との交流の際に起こった出来事をきっかけに発案・構想した。帰国後に教材化に着手し、マレーシアに限定せずに、日本人学校経験者などから各国の事例を広く集めるところからはじめ、ある程度形になってきた段階で鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会の研究テーマとして教材化に向けて具体的に動きだし、2021 年 8 月に第 1 版を発行した。

掲載した事例はアジアのものを中心に 20 件あり、統一したフォーマットのワークシートの形にしている。私自身の体験や調査から得たものもあるが、教材化に取り組んでいることを積極的に周囲に語った結果、趣旨に共鳴した人からも多くの事例を寄せていただいた。

ワークシートは授業１単位時間を通して使用するものではなく「15 分で使える教材」を目指している。小学校 45 分、中学校 50 分の授業の中で、例えば導入や、授業を深めたり広げたりするときの教材として、授業の中に差し込んで容易に使用できる形にした。また、各ワークシートは、バラバラに使用することを想定して１事例１ページにまとめ、ページ番号を付けず、現場の使いやすさにこだわった。

目　次

はじめに

本教材の構成と使い方

活用例

事例
① 約束の時間にいつも遅れる〔マレーシア〕
② どうしておつりをばらまいて渡すの〔中国：上海〕
③ 一度口に入れた寿司をはぐなんて〔マレーシア〕
④ 工事の後に片付けをしないの〔マレーシア〕
⑤ 歩行者用信号を守る日本人を理解できない〔日本〕
⑥ 一緒につくった料理を食べない〔マレーシア〕
⑦ 学生用シェアハウスで調理をしてロ論になった〔オーストラリア〕
⑧ 飲茶をしている隣席の方が机をたたく音が耳ざわり〔中国：香港〕
⑨ どこでもゴミをポイ捨てする〔マレーシア・世界各地〕
⑩ ファストフード店でトレイを片付けたらしかられた〔中国：香港〕
⑪ スーパーのレジ近くでカートを放置する外国の方がいた〔日本〕
⑫ 至る所に「小心地滑（すべるから注意！）」の看板がある〔中国：香港〕
⑬ 建物の中でエアコンが効き過ぎている〔中国：香港〕
⑭ 学生用シェアハウスでの留学生ゴミ問題〔オーストラリア〕
⑮ 「ありがとう」を言わない〔モルディブ〕
⑯ 順番を守らない〔イタリア〕
⑰ 仕事の分担が細かく分かれている〔インド〕
⑱ みんなで使った場所の掃除（後片付け）をしない〔インド〕
⑲ それを食べるのですか〔ブルキナファソ〕
⑳ 食べ残すなんてもったいない〔マレーシア・他〕

編集・協力委員

※　各ページをワークシートとして活用していただくことを想定していますので、ページを記してありません。事例の番号でお探しください。
※　事例にある国名は、どこの国で体験したかを意味します。その国に行ったら必ず起きる事例というわけではありませんし、その国以外でも起きる可能性があります。また、その事例の理由となる背景は、同じ国の中でも地域によっては、異なる可能性もあります。

〈本教材の構成と使い方〉

事例には、違和感を感じた事例を記載し、イライラしたり、悩んだりした状態で止め、児童生徒の思考を促します。

次の思考させる二つの欄では、様々な考えが出てきますが、表現には気を付けさせながらも、肯定も否定もせず、全てを受け入れることが大切になります。

左側の欄では、直感的な思考（その瞬間、自分や、日本人などのように考えるか）を考えさせます。

右側の欄には、その方もしくはその国の方が、その瞬間に何を考えているかを想像してさせます。思い付かない場合は、相手のことを思っていることが多いので、そのことを確認します。

下手分は、解説編になります。違和感を感じた事例の原因を直接聞いやけたり、調べたりし、理由が分かった瞬間に、納得したり、ゆとりをもって考えることができるようになったりした体験が述べられています。また、自分の考えを説明して相互理解でき、事例が解消した体験や、発展的に考えて欲しい問いかけ等で構成しています。

〈活用例〉

本教材は、児童生徒に考えさせる様々な場面で御活用ください。各教科等において次のように活用されることを想定しています。

○　道徳科における活用例
→　相手の行動には背景があることを理解するために考え議論する課題として活用する。
→　国際理解だけでなく、道徳的諸価値において活用することができる。特に、人間理解や他者理解を深めるために活用することが有効である。
○　社会科における活用例
→　生活の背景にある歴史や宗教、地理的な条件について実感を深めるために活用する。
（例）小5「世界とつながる自動車」
　　海外の工場で働く現地の人々を理解した経営について考える…「イスラム教の祈りと日本の工場で働くこと」等
（例）中1地理「気候を生かした生活」
　　熱帯地域の食について考える…「なぜおもてなしの寿司が拒絶されたのか？」
○　外国語科における活用例
→　事例を基に「どのような質問だと、相手が率直に返答してくれるか。」、「どのように伝えれば、相手に伝わるのか。」等を考える際に活用する。
→　どんな言葉が、より相互いのことを理解し合えるのかを考えさせる。
→　相互理解をするために外国語を学ぶことが重要であることに気付かせる。等

ワークシート①　名前〔　　〕

<事例1>
「約束の時間にいつも遅れる」〔マレーシア〕

マレーシアでは、自宅の飲料水は大きなウォーターボトルで買うのが普通です。ところが、契約している水の販売店にウォーターボトルを注文すると、店員さんはいつも、約束した時間から30分～1時間くらい遅れて運んで来るのです。先輩から「時間にルーズな国柄ですよ。」と聞いていたので、私は、あきらめていました。

その時、日本人は、どう感じ、どう考える？	事　例	その時、その国の方は、何を考えている？
	事例1 約束の時間にいつも遅れる	

<事例1の続き>
「約束の時間にいつも遅れる」〔マレーシア〕

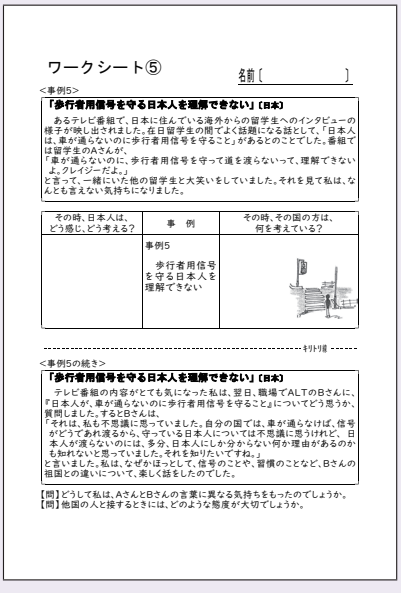
ある日、どうしていつも約束の時間に遅れてくるのか、マレーシアの方に聞いてみました。すると、
「マレーシアでは、約束の時間ピッタリに相手を訪問すると、相手が準備できていないために慌ててしまうので、約束の時間よりも30分は遅れていくことが、相手への思いやりなんです。」
という答えが返ってきました。
遅れてくるのは、自分への思いやりだったんだと分かった瞬間、それまで感じていたイライラがすっと消えていきました。

しばらくして、「やっぱり約束の時間どおりに届けてほしい。」と思った私は、思い切って店員さんにお願いしてみました。
「私は、時間ちょうどに届けてほしいんですが、できますか。」
「できますよ。」
店員さんからは、軽い返事が返ってきました。
次回の注文の時が来ました。ドキドキして待っていると、なんと、本当に時間ちょうどに運んで来てくれたのです。それだけではなく、それからはずっと、時間どおりに運んで来てくれるようになったのです。

【問】このことから皆さんは、どんなことを考えましたか？

「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」目次、使い方、ワークシート例

小学校５年道徳科における実践では、資料「美徳を守る人」を読んで感想を話し合い、「日本人のよさ」を確かめた。その後、ワークシート⑤「歩行者信号を守る日本人を理解できない」を使用し、他国の方が日本人の行動を理解できない例があることを知り、その場合にはどんなことを伝えたらよいのか考えさせたり、逆に、日本人が他国の方の行動を不思議に感じる場合について考えさせたりする中で、相手の言葉や行動の背景を考えることの大切さについて学ばせることができた。



ワークシート⑤　名前〔　　〕

<事例5>
「歩行者用信号を守る日本人を理解できない」〔日本〕

ある テレビ番組で、日本に住んでいる海外からの留学生へのインタビューの様子が映し出されました。在日留学生の間でよく話題になる話として、「日本人は、車が通らないのに歩行者用信号を守ること」があるとのことでした。番組では留学生のAさんが、
「車が通らないのに、歩行者用信号を守って道を渡らないって、理解できないよ。クレイジーだよ。」
と言って、一緒にいた他の留学生と大笑いをしていました。それを見て私は、なんとも言えない気持ちになりました。

その時、日本人は、どう感じ、どう考える？	事　例	その時、その国の方は、何を考えている？
	事例5 歩行者用信号を守る日本人を理解できない	

<事例5の続き>
「歩行者用信号を守る日本人を理解できない」〔日本〕

テレビ番組の内容がとても気になった私は、翌日、職場でALTのBさんに、「日本人が、車が通らないのに歩行者用信号を守ることについてどう思うか、質問しました。するとBさんは、
「それは、私も不思議に思っていました。自分の国では、車が通らなければ、信号がどうであれ渡るから、守っている日本人については不思議に思うけれど、日本人が渡らないのには、多分、日本人にしか分からない何か理由があるのかもしれないと思っていました。それを知りたいですね。」
と言いました。私は、なぜかほっとして、信号のことや、習慣のことなど、Bさんの祖国との違いについて、楽しく話をしたのでした。

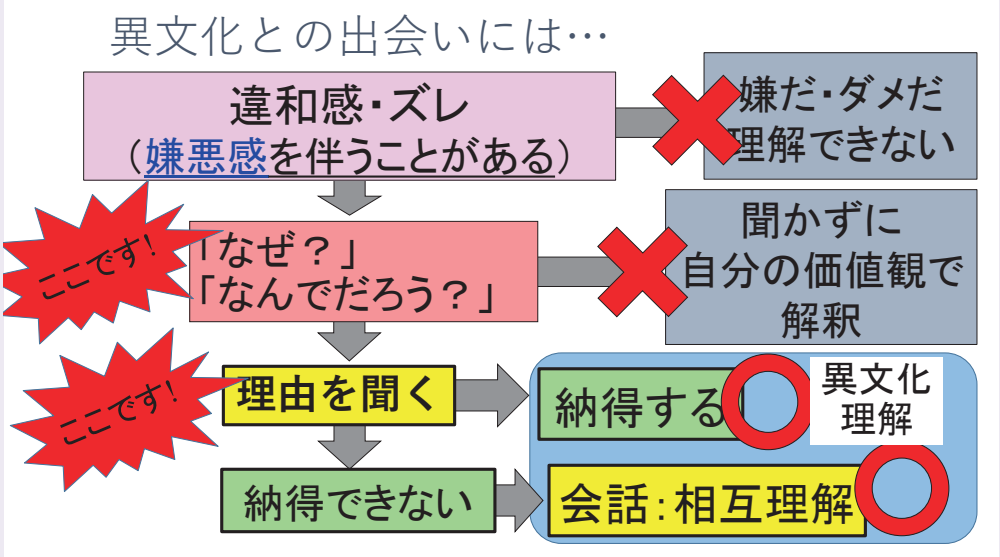
【問】どうして私は、AさんとBさんの言葉に異なる気持ちをもったのでしょうか。
【問】他国の人と接するときには、どのような態度が大切でしょうか。

小５道徳科「美徳を守る人」で使用したワークシート⑤

国際理解教育では、児童生徒が、異文化交流や国際理解への興味・関心を高めることができるように、互いに異文化のいいところを知って、理解し合うという内容が基本となることは間違いない。そのため、違和感を直視した教材や取組は少ない。しかし、異文化がぶつかるところには必ず違和感や嫌悪感が発生する。本教材の特色は、その違和感や嫌悪感が必ず存在することを前提としているところにある。そこから出発して、違和感や嫌悪感を乗り越えて相互理解を進めるためにはどのような視点が必要で何をするべきかを考えるという、従来の国際理解教育を補完するものとなるように意識して作成した。

日本人は共通した価値観をもち、しかもその価値観を他者ももっていて当然だと考える傾向が強いのではないかと考える。そして、他国の方々にもそれを期待しがちである。それが結果的に違和感や嫌悪感、偏見や差別を生むことにつながってしまう原因となっていると考える。「同じ文化をもっていないから違うのは当然である。」と捉えられることが、グローバル人材への第一歩である。

これからの多文化共生社会を生きる子どもたちには、異文化の素晴らしさに気付き、感動する豊かな感受性を育ててほしいのと同時に、現実は美しいものばかりではないということも理解した上で、違和感を乗り越えるための見方・考え方を身に付けてほしいと考えている。その違和感をもったときに、そこで「どうしてそうなのか？」と調べたり、他国の方と対話したりすることができる人を育てたいと考えている。



「違和感・嫌悪感」から異文化理解にいたる道筋

評価と課題

研修会などで事例を基に違和感について話すと、「こんなことが起きるのですね。」と、興味をもってくださったり、「これは必要な視点ですね。」と重要性に気付いてくださったりする教員が多い。さらに、「これは人権教育そのものですね。」という反応も多くいただく。普段から現場で人権教育に取り組んでいる教員には、この違和感から学ぶ価値を理解してもらえる素地があると感じている。だからこそ、授業の中ですぐに使える教材をつくることが重要であると考えている。

本教材は、2021 年夏に、第 24 回九州ブロック海外子女教育・国際理解教育研究協議会鹿児島オンライン大会で公開したばかりである。現在、鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究会の Web サイトで公開しているので、ぜひ使っていただきたい。すでに使用された先生方からは、「意外性のある生きた内容で、子どもたちがとてもよく考えている。」、「分かった時の爽快感が心地よい。」といった感想をいただいている。今後は、「この授業のこの場面で使うと効果的だった。」という情報も共有していきたい。また、内容に共感していただけたら、ぜひ御自身が体験された事例を教えていただき、次の第２版へつなげていきたいと考えている。

実践に至った経緯と提言

2007 年から４年間勤務したジョホール日本人学校（マレーシア）は、児童生徒数 120 名程度で、駐在員家庭の子どもが多かった。

国境を接するシンガポールの日本人学校から分かれる形で 1997 年に創立された当初は通学時間が大きく短縮されることが好意的に受け止められた一方で、「シンガポールの方がよかった。」、「この学校ができなければ、シンガポールの学校に行けたのに。」といったネガティブな声も多かったらしい。そのため教員の間では、「マレーシアのよいところを子どもたちに知らせたい。」「マレーシアを好きになってもらいたい。」という意識が代々受け継がれてきていた。歴史や自然環境、伝統芸能、ピューター工場、市場など現地の素材をモチーフにしたオリジナル教材が毎年作られ、私の赴任期間中に総数 100 を超えた。内容は単なる歴史や自然の紹介にとどまらず、たとえば世界的に厳しい水準で知られるマレーシアのハラル認証と品質管理についての教材など、教科を横断した複雑なテーマについても取り扱っていた。

ジョホール日本人学校の教員は、こうした努力を重ねてきてマレーシア好きの子どもたちが増えているという実感を得ていた。つまり、プラスの情報を与えることでマレーシアへの認識がよくなり、現地理解・国際理解教育が進んでいると考えていたのである。

ところがある日、現地校とのサッカーの交流試合の後、この認識を覆す、ある出来事が起きた。現地校のチームは、いつものように時間に遅れて到着した。現地校は男子チーム、日本人学校は男女混合チームだった。試合後、両チームが握手を交わすとき、相手チームの子どもたちが、男子児童とは握手するのに女子児童の手は握らずにパンとはたいていく。異性と握手をしないというのはイスラム教の教えなのだが、それを知らない（思い至らない）日本人学校の子どもたちは驚き、ショックを受けた。さらに、校庭にゴミをポイ捨てしていく相手校の子どもたちの姿に、「礼儀知らず。」「失礼だ。」と怒った。

当時小学６年の担任だった私は、「文化の違いから生じるマイナスのイメージから、逃げていたのではないか。逃げていて、子どもたちは本当にグローバル人材として育つのか。」と考え、直後の総合的な学習の時間の内容を変更し、急遽このことを取り上げることにした。

「普段感じているマレーシアでの嫌なことや、なんでそんなことをするのだろうと思っていることを出してみよう。」と呼びかけると、様々な事例が子どもたちの口から次々に出てきた。「時間を守らない。」「ごみをポイ捨てする。」など、発言は止まらずに 30 項目以上になった。「パンドラの箱を開けてしまったのかもしれない。」と焦りを感じるほどだった。

次に子どもたちは、学校の現地スタッフに「なぜそういう行動をとるのか」をヒアリン

グした。すると、時間を守らないことについては、「約束の時間ピッタリに行くと、相手の準備ができていなくて慌てさせることになるかもしれないと考えています。遅れていくことは相手への思いやりなのです。」などの答えをいただいた。今までマナーが悪いとか、失礼だと思っていたことが、自分たちを大事に思ってくれているからこその行動だということが判明して、子どもたちは納得し、驚くほどの笑顔となった。また、「遅れてくることは分かったけれど、約束の時間に遅れることは日本人には失礼だと感じるふるまいであり、私たちは時間どおりがいいのです。」と告げたところ、改善される事例も生まれることとなった。どうしてそうなのか質問することを通して、お互いがお互いの「感じ方」を分かり合えるということを実感することができた経験は、子どもたちのマレーシアの見方を大きく変化させていった。

実際に異文化の方々と生活を共にすると、違和感は必ず生じる。その違和感に出会った瞬間にどういう対応をするべきなのか。その違和感を解決して乗り越える見方・考え方を身に付けておかないと、将来、多文化共生社会で生きる子どもたちが苦しむことになる。このことに気付いた以上、解決策を考えないのは「逃げ」になると思った。

帰国後は鹿児島県鹿屋市の公立小学校へ着任。「違和感」を素材にした教材づくりを本格的にはじめた。在外教育施設への派遣は「長期研修」なので、現場に還元しなければならない。私の場合は、その一つが「事例集」の制作につながった。一緒に取り組んでくれた編集委員は、鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会の仲間たちをはじめ、青年海外協力隊経験者、JICA デスク、ALT、留学経験者など、この取組に共鳴してくれた人々だった。話を聞くと、皆、同じように海外での生活で違和感を覚え、そこを乗り越えてこられた方々だった。

ここまで教材化を進めてきたモチベーションは、使命感ではないかと思っている。

日本では多文化共生社会はすでに始まっていて、子どもたちはその中を生きている。違和感はもって当然であること、けれどもそれは乗り越えられるものなのだということを知ってほしい。それを子どもたちに体験させておくことは、必ずグローバル人材の育成につながっていく。また、学校でこのことを教えられるかどうかで、子どもたちの将来は大きく違ってくる可能性すらあると思っている。

毎年、本県からの派遣教員の歓送会で、この違和感の話をしている。そして「自分が体験した違和感を記録し、『どうしてそうなのか』を質問してください。」と呼びかけている。中には、帰国後、自分の感じた違和感とその背景を報告してくださる先生方もいらっしゃり、この取組の価値を感じている。

本教材集を軸とした取組をもっと広げていきたいと考える。いずれは県をまたいで全国でネットワーク化できないかと思っており、そのためにどんな方法があるかを検討しているところである。